2012年5月1日発行（奇数月1日発行）通巻第22号

あ・うん

金剛禅総本山少林寺広報誌

vol.22
2012 皐月・水無月

2012年度事業方針

金剛禅の特色を生かし布教活動拡充を図る

金剛禅の特色を生かし布教活動拡充を図る

現代社会は、少子高齢化、高度情報化が著しく、また、長引く景気低迷や世界的な金融危機など、世界情勢は混沌としている。その上、失業率の上昇や非正規雇用の拡大、雇用の不安定化などのさまざまな先行き不安は心の病にも影響を及ぼし、2011年の自殺者数は3万513人で、1998年以降14年連続で3万人を超えている。人間の生き方の規範喪失、職業倫理の低下など、年代に関係なく人心の荒廃が深刻な状況にある。

さらには、公益法人制度改革後の宗教法人への影響や、税制改革として消費税増税の問題などの制約も厳しくなり、また、レピュテーション（評判）・リスクと呼ばれる新たなリスクが、企業・団体を脅かしている。これは組織の言い分ではなく、社会が求める情報を偽りなく語ることが大事であり、「社会の評価」が企業・団体の浮沈を決めかねない時代に来ているということである。

こうした社会状況であるからこそ、「〝半ばは自己の幸せを　半ばは他人の幸せを〟の信念を持って行動できる人を育て、平和で豊かな社会づくりに貢献する」を理念として、人づくりと理想境建設を目的とする金剛禅教団としての果たす役割がますます重要となっている。

昨年度は、組織機構改革施行と開祖生誕100年、そして東日本大震災により大きな被害を受けた激動の年であった。これを重大な予測不能な事象を切り抜けるための示唆と受け止め、厳しい緊縮予算の中、より確かな形での進展が見えるように、道院の新設、継続、門信徒の増加を図る教訓としたい。

組織機構改革施行にあたっては、改革全容を緻密に点検、調整し、完全稼動を果たしたが、その趣旨に基づいた活動展開については、さらに点検、調整してゆくことが必要である。そのためにも金剛禅の充実を図り、金剛禅の特色を生かした取り組みを行ってゆく。

東日本大震災の影響については、被災県の中で1道院を除くすべての道院が厳しい状況の中、活動を再開しているが、特に福島の原発問題などの影響で復興には程遠い状況もあり、当教団においても復興支援に向けて昨年に引き続きサポートを行ってゆく予定である。

以上の状況を踏まえ、2012年度の事業方針を以下のとおりとする。

1. 少林寺拳法グループのビジョンの下、少林寺拳法の価値と信頼性のより一層の向上を図る。
2. 組織機構改革後の運営全般の総点検と調整を図る。
3. 布教体制の点検とさらなる門信徒の教化育成、布教の充実と門信徒数の拡大を図る。
4. 金剛禅教団の拠点としての東京別院の活動の充実を図る。
5. リスク・マネージメントの研究、調査、対応の充実を図る。

◆重点実施項目および事業概要

(1)教区（都道府県）および小教区活動の活性化

金剛禅独自の教区活動が都道府県や小教区にて実施できる体制を整え、教区活動の活性化を図る。総代のあり方と都道府県教区とのつながりを強化する。

(2)道院の活性化

道院活動の意義を明確にし、金剛禅としてのあり方と専有道場の活用につなげる。道院長研修会の内容は金剛禅の特徴を生かし、道院活動に役立てられる研修を実施する。

(3)道院長の認定制度の見直し

金剛禅総本山少林寺

道院長心得対象者に対して、すべての条件を満たすことができるよう支援する。道院長の認定内容を見直し、若手道院長の育成につながる制度を確立する。

(4)教化育成の見える化

僧階取得者の分析とさらなる僧階充実に向けての取り組みを行い、僧階の取得を促進する。金剛禅の充実につながる教化育成のための講習会を実施する。

(5)門信徒の安全管理と人権を含む精神的保護に関する注意喚起を行う。

(6)教団運営に伴い発生する法律問題の対応、指導、契約、交渉支援など、法的実務の強化および、内部統制の充実を図る。

(7)教団内部に潜在する危機要素に関する調査研究と対応を行う。

◆事業項目

1. 儀式行事の実施および門信徒の教化育成

(1)新春法会
(2)表彰式(道院長の勤続表彰)
(3)達磨(だるま)祭
(4)開祖忌法要
(5)物故指導者顕彰法要
(6)講習会1次、2次
(7)少年部指導講習会
(8)帰山行事

2. 布教者の養成と研鑽

(1)道院長資格認定研修会
(2)道院長研修会
(3)認証式
(4)僧階補任講習(中導師・大導師)、僧階補任講習(少法師)
(5)小教区活動の推進
(6)都道府県教区長研修会
(7)都道府県教区長会議
(8)教区研修会への講師派遣および当教団主催の教区研修会開催
(9)若手道院長育成と道院新設の促進のための新たな施策の策定

3. 布教・教化育成・組織運営の研究・開発

(1)門信徒数の増加推進施策の策定
(2)教義と行に関する研究
(3)本山委員会活動の活性化

4. 布教・広報に関する事業

(1)一般参禅・参観者の受け入れ
(2)入門用リーフレットの作成
(3)儀式行事用DVDの作成
(4)ホームページ運用活用
(5)広報誌『あ・うん』の発行充実

5. 東京別院の布教活動

(1)金剛禅教団の拠点としての整備
(2)地域高齢者や住民を対象とする参禅教室などの継続的実施
(3)関東教区における研修機関として、門信徒、道院長対象の講演などを実施

東京別院　別院長交代

就任挨拶

大澤(おおさわ)　隆(たかし)
二九九期生
大導師
正範士七段

秋吉好美別院長の後任として、4月1日付で着任いたしました。浦田代表の下、金剛禅総本山少林寺東京別院が布教拠点としての重要な役割を果たすべく、さらに発展するよう、別院長の重責を果たしてまいりたいと存じます。

大きく変化する社会の中で、新時代にふさわしい組織のあり方を実現するため、改革が積極的に進められています。この改革の必要性、有効性、効率性を広め、各儀式行事、広報を通じて門信徒の皆様へ多くの情報発信をしてゆきたいと思う次第です。また、東京という地の利を生かし、門信徒の皆様との交流の場としても生かしてゆく所存でもあります。東京別院がさらなる成果を生み出していくことができるよう運営に取り組んでまいりますので、一層のご指導ご鞭撻(べんたつ)を賜りますようお願い申し上げます。

退任挨拶

秋吉(あきよし)　好美(よしみ)
一五七期生
大導師
大範士八段

「光陰矢の如(ごと)し」という諺(ことわざ)があります。03年8月より東京別院長を拝命し、9年間という長くて短い時間が経過しました。

東京別院入職の目的の一つは、現在の各法人独立性を見越し、とりわけ金剛禅として高齢者拳士を対象とした少林寺拳法の科目表作成と地元密着を図る運動についてでした。科目表作成は試行錯誤の中、現在のコース制「ゆた・楽コース」に変化しましたが、一応の下地は整ったのではと思います。関係者、職員のご協力で形が見える段階に至り職務の一端を果たすことができたことに心より深謝申し上げます。

今後は、地元道院の充実と教区への貢献、大学監督としてより一層の充実に注力していく所存であります。従前に増してのご指導、ご鞭撻をお願いしてご挨拶といたします。ありがとうございました。

2011年度本山行事報告

2011年度に本山で開催された主な行事について、以下のとおり報告する。

①道院長研修会

本山で4回、札幌(北海道・東北地区)で1回開催した。組織機構改革施行後の制度変更に伴う確認、点検を行うとともに、金剛禅布教の充実、次世代指導者の育成、教区・小教区活動のあり方に関する研修を行った。

②道院長資格認定研修会

2回実施し、33名が受講した。道院の役割や、道院長としての心構え、使命感に関する講義のほか、各種事務手続き方法に関する講義を行った。これらに加えて、金剛禅教学に関する講義を重点的に行い、実技審査と面接審査を実施した。

③認証式

10月と2月に認証式を行った(震災の影響により、6月は中止)。新たに31名が道院長として認証された。これまで道院運営を支えてこられた家族や拳士、関係者らが参列する中、金剛禅の布教に努めていくことを誓約し、浦田代表から認証書および道院長の辞令を受けて、正式に道院長としてのスタートを切った。

④僧階補任講習(前期、後期)

中導師・大導師の僧階補任に当たり、修行者として自己を深く見つめ、布教者としての使命感を高めるための講習を2回実施し、25名が受講した。教学に関する講義、儀式における所作の確認・実習、少林寺拳法修行法、法話演習・法座の実習を行い、講習終了後には僧階辞令が授与された。

⑤少法師補任講習

布教者のあり方と任務に関する講義のほか、受講者による地域社会での活動報告、また教団における教区の役割について活発な討議を行い、6名が少法師に補任された。前年度実施予定であったが、震災により延期したため、2011年度の臨時開催となった。

⑥講習会(1次、2次)

「原理原則」をテーマとして2回実施し、340名が受講した。技法における原理原則が少林寺拳法の技術のみならず、日常生活にも生かしていけるよう、技術修練、講義、討議に至るまで、終始テーマに即して行った。また、四段以上は選択制として羅漢圧法の講習も行った。

⑦少年部指導講習会

「少年部指導における原理原則」をテーマとして行い、114名の拳士が受講した。単に指導技術を身につけるのではなく、その根底にある少年部指導における考え方を理解したうえで、指導技術を活用していけるよう講習を行った。準備体操の紹介、指導技術の共有化に加え、本年は受講者が指導者役と少年拳士役を演じながら指導実習を行い、少年部指導技術の向上を図った。

⑧だるま祭

東日本大震災復興・支援2011年だるま祭として、震災からの復興と、達磨大師の不撓不屈の精神になぞらえて、「生かされている生命に感謝~七ころび八おき~」をテーマに開催した。法要では本年も一般開場を行い、達磨大師の遺徳を偲んだ。続く演武会では多くの拳士が参加した。館内の展示では、宗道臣生誕100年にあたり、開祖の写真展をはじめ100年事業に関する展示を行った。また東日本大震災の写真展を行い、チャリティーバザーやゲームなどを催し、収益金の一部を東日本大震災の義援金として寄付した。

⑨新春法会

新年の幕開けとなる行事で、道院長、拳士約600名が参列する中、浦田武尚代表の年頭挨拶をはじめ、門信徒代表年頭挨拶、道院長勤続表彰、允可状の授与などが行われた。また、演武会、稽古始め、新春懇親会などが催されたほか、境内では一般拳士や法縁関係者へぜんざいがふるまわれ、多くの道院長、拳士でにぎわった。

⑩帰山

7回開催し、713名が帰山した(震災により、4、5月の開催を中止した)。本山の雰囲気の中、宗門の行である少林寺拳法の修練や金剛禅に関する法話を通じて、一層の修練意欲の向上を図った。また、拳士の家族や保護者対象のプログラムも併せて実施した。

清風

vol.22　宗務局長　田村 明

志を一つにする場所を守るということ

礼拝詞に「深く三宝に帰依し」とある。仏教を学ぶものにとって最も必要なことである。三宝に帰依することで仏教徒とされる。それは仏・法・僧の三つの宝のことである。仏とは釈尊のこと、法とはまさしく教えのこと、僧とは修行するものすべての集まり（サンガ）のことである。

われわれの組織に置き換えてみると、開祖、ダーマ、門信徒（拳士）と考えると解りやすい。ただ、開祖は「金剛禅では達磨は祖師であり、私に至っては諸君の先達でこそあれ、自分自身を仏などとはこれっぽっちも考えたことないぞ」と言い切っているが……。金剛禅門信徒として三宝に帰依し、仲間とともに開祖の志であり目標である「理想境の建設」に向かって突き進まなければならない。そして、それを誓う場所は、やはり本尊の前であろう。道院においては仲間とともに礼拝施設の前で、本山においてはその大元である本堂の礼拝施設の前で。

志を一つにする場所をわれわれが守っていくことはこの組織を守るということにつながる。志を一つにする場所こそが道院であり、本山である。仲間とともに誓願の三つの誓いを確認し合うことが、開祖の志を受け継ぐすべての拳士の願いであり、信念の表明なのである。そして信条で実践を心に誓うのである。

開祖語録ダイジェスト

1976年度第３次指導者講習会にて

この間オリンピックがありましたね、モントリオールで。あのときに女子バレーボールで金メダルを取った選手たちが６人、参議院議長公邸で開かれた座談会の席で、引退声明を出しました。山田監督は、新しい〝魔女〟たちの引退理由についてこう語っています。「彼女らが金メダルを取って得たものは、わびしさと虚しさだけである」

金メダルを取って、世界の王者になった、それなのに残ったものは何かといえば、わびしさ――これは東洋人独特の言葉ですが、精神的なものも物質的なものも含めた、寂しいような、虚しいような、なんか形のない空虚感みたいなものですね。

前の〝魔女〟たちも同じことを言っていたけれど、青春も結婚も棒に振って一生懸命バレーボールだけをやってきて、金メダルって一体何なんだろうと。チャンピオンになったとたんに、追われる立場になって、行くところまで行ってしまったから、山でいえばもう登ってしまったからあとは下りる以外ないんですね。

少林寺拳法は、そういうことはないですね。それはなぜか。

それは人をやっつけて勝って、自分だけを主張できるというような武道やスポーツでは、だめだということを見つけたからです。だから「行」としてのあり方に最初から徹し、日本民族をつくり直すことに私は主眼を置いてきた。

少林寺の行としての尊さ

少林寺の「行」としての尊さがそこにあり、その中で死ぬまで修行の喜びがある。だから諸君も今日までずっと続けてきたんでしょう。君たちは将来の指導者だ。それに誇りが持てるから、もう一つ上を目指してこうして集まってきてるんじゃないか。

※この開祖語録中の「少林寺」は。金剛禅総本山少林寺を意味しています

法を問い
学を修める

vol.22

文／川端　哲

温故知新、可以為師矣

以前、「原点回帰」ということについて投稿させていただきましたが、同時に「温故知新」という四字熟語が頭の片隅に浮かんできました。

「温故知新」は言わずと知れた孔子の言葉であり、四字熟語の代表的なものの一つです。

もう少し詳しく説明すると、この出典は「論語・為政（しせい）」の中に「温故知新、可以為師矣」とあり、その意味は〝古い物事も、新しい物事も知っていて初めて人の師となるにふさわしい〟となります。

現代社会では、新しいものには目移りをするが、古いものには見向きもしない傾向が見受けられます。故（ふる）きを温（たず）ねて新しきを知るなどというけれど、最近は故きを温ねはしても、新たなることにそれを生かそうとする創意工夫に欠けるのではないかと考えさせられるきょうこのごろです。

さて、われわれ金剛禅の修行者としてはいかがなものでしょうか。開祖は事あるごとに原点に帰れと言われていましたが、又われわれは今、本当に原点を見つめ直しているのでしょうか。人の心は移ろいやすいゆえ、日々質の向上に努めなければならないとも言っておられました。開祖の志を継ぎ、人づくり、国づくりの大道を進まなければ、金剛禅の布教者として、また修行者としてはふさわしくないのです。

わが国はバブルが弾（はじ）けてからろくなことがありません。阪神・淡路大震災、地下鉄サリン事件、リーマンショックによる経済の低迷、さらに一昨年は各地で風水害が多発、昨年は17年前の大震災を凌（しの）ぐ規模の東日本大震災が東北地方を中心に甚大な被害をもたらしました。また大企業の損失隠しや私物化が次々と露見し、一体何を信じてよいのか不透明な時代を招いています。

世界に目を向けて見ても、復調の兆しは見えるもののアメリカ経済の失速に加えヨーロッパ諸国の経済低迷が進んでいます。

このような不安定な社会であるからこそ、少林寺拳法の開創の動機と目的を十分に理解し認識して、迷わず理想境建設に邁進（まいしん）して行かなければなりません。

わかっていることと、できることが一致しなければ意味がなく、言行一致に努めなければ金剛禅の修行者とはいえないのであり、そのことこそが開祖の志を継ぐことなのです。

最近帰属意識に欠けるということを耳にしますが、わが組織もその例外ではありません。少林寺拳法の修練だけをやっておればよしとする傾向は、組織を硬直させる一因となります。

目的である金剛禅の修学をせずに、少林寺拳法は存在しないことをわれわれは真摯（しんし）な気持ちで受け止め、教えと技法をバランスよく鍛えていかなければならないのです。

冷静に考えて見るとわれわれは過去から正しく学び、未来に生かそうとすることを本当に考えているのでしょうか。

高慢さ、思い上がりの結果が現代社会を生んでいるといっても過言ではありません。

われわれ金剛禅の修行者として、又布教者として本当に開祖の志を受け継ぎ、正しく理解をして未来に生かそうとしているのかを今一度各人が胸に手を当てて考えるべきときではないのでしょうか。

故きを温ねて、新しきを知ろうではありませんか。

道

浦田武尚

今は幸せ？

八戸東道院 道院長　原 宏

2012年1月7日、本山で「道院長勤続30年」の表彰を受けた。1982年10月24日、師家より正認証の許可を受けたときから、「一生続ける覚悟」であった。だから30年というのは一つの通過点にすぎない。しかし、節目として「よくここまで頑張ってこれたな」と自画自讃している。もちろん、家族や法縁有志の理解と協力があったからこそである。ここまで来たら、あとは「死ぬまでやるしかない」と思っている。

以前、某道院長から、「原先生は立派な専有道場もあるし、組織内での地位もあり、羨ましい」と言われたことがある。傍から見れば幸福に映っているのかもしれないが、人は皆、法印として「一切皆苦」を抱えているものなのだ。教えによれば、この「苦」なるものには、三苦（苦苦、壊苦、行苦）がある。家族一同、無病息災なのが、至極幸せなことであるが、私の長男と次男は身体障害者である。ここに私の痛い痛い「壊苦」がある。二人とも「神経線維腫症」という特定疾患により、体の至る所に腫瘍ができて、それが神経を圧迫し、視覚・聴覚・平衡障害を起こす。さらに脳幹を圧迫し、生命を危うくする。腫瘍がこれ以上大きくなると命の保証はないと医師から宣告され、長男は2006年10月に開頭手術により腫瘍を摘出した。22時間にも及ぶ手術に私は立ち会うこともなく、その前日に東海武専に出張していた。講義中、「孝」の説明に入ったところで胸が詰まり涙が出てきて、あとは講義にならなかった。長男に対して「孝行」をしてあげることのできない自分が情けなかった。その後次男も同じ手術を受けた。

四人いる子供の内、男だけに腫瘍ができた。長男から「何で結婚したのだ！　結婚しなければ僕は生まれてこなかったのに…！」と責められる女房がいちばんつらい思いで泣いていた。

人はこの世に生を受けたからには生きなければならない。順風満帆に生きることのできる人は皆無である。なぜなら「一切皆苦」であることは法則なのだから。しかし、だからといってそれを悲観してよいなどという教えではない。そう、「行苦」の教えがあるではないか。

今をよしとせず、さらなる発展・向上を目指し、自己を少しでもよい方向に変えたい、変えなければならないという、可能性としての「行苦」の教えこそ、われわれ金剛禅門信徒の真骨頂とするところではないか。二人の息子の身体障害（壊苦）を治癒することはできなくても、二人と向き合う心は変えることができる。何をか言わんや、最もつらいのは私ではなく、息子たちなのである。

30年間道院長としてある意味では家族を犠牲にして、少林寺拳法の行事に奔走してきた。これからは半ばは家族のことを思い、懺悔のつもりで壊苦に負けずに生きていこうと思う。

そして、半ばは金剛禅運動を仲間（同志）とともに展開することで、少しだけ人生を楽しみたい。それくらいは許してほしい。なぜならば『この道より、我を活かす道なし。この道をゆく』決意だからである。

「死にざまは生きざまである」ことを肝に銘じて、よい死にざまをするために、よい生きざまができるように、これからの一日一日を大事にして、心豊かに生きていきたい。

投稿大募集　〒170-0004 東京都豊島区北大塚2-17-5　東京別院 広報誌担当宛　TEL.03-5961-1400　FAX.03-5961-1401
e-mail：aun@shorinjikempo.or.jp　※投稿記事は20字×69行を目安とし、名前、所属、連絡先を忘れずにご記入ください。
なお、誌面の都合上、原稿内容の整理・編集をさせていただく場合があります。原稿の選択はご一任ください。

ダイジェスト

道院長　vol.7

元気の素

熊本清和道院
道院長 大濱清充（39歳）

心に一つを決め未来へ結ぶ開祖の教えを多くの人に伝えたい

――道院での指導方針や指導法としての工夫を教えてください。

指導方針は、とにかく〝楽しく〟〝伸び伸びと〟です。日常の生活においての挨拶など、まずは基本的なことをきちんとできるように指導しています。

道院では子どもたちの素直さと笑顔に元気をもらっています。自分の教え方（やる気）次第で楽しそうにしたり、退屈そうにしたり……すぐに反応が返ってくるのにはビックリです。自分自身もいろいろ勉強させてもらっています。

――道院長として今後の夢は？

リーダーシップをとることができ、社会に貢献できる拳士を一人でも多く育てていくことが夢です。

※プロフィールなど、金剛禅オフィシャルサイトの全文もぜひご覧ください。

ダイジェスト

vol.7

志をつなぐ

速水 信之（はやみ のぶゆき）　211期生
少法師大範士八段

開祖の教えと技に魅せられ、歩むこの道に悔いはなし

転勤が避けられない国家公務員の立場で、よく道院長を続けられたと感慨深いものがあります。閉鎖を覚悟したときもありましたが、協力者や拳士に支えられ、いろいろなことが幸いして続けてこられました。

約40年前、医師の誤診で危うく命を落としかけ、虫垂穿孔（せんこう）腹膜炎で約1か月入院したことが人生について考える機会になりました。そして、その年にまずは職場に支部を、3年後には道院を設立しました。また、支部設立の翌年からは本部委員を拝命し、精いっぱい務めてきました。

誰でも努力すれば指導者になれるという開祖の教えと精妙な技に魅了され、今後もこの道布教に務めてまいりたいと思っています。

※プロフィールや開祖の思い出など、金剛禅オフィシャルサイトの全文もぜひご覧ください。

1972年伊良湖岬にて

ここから道院長としての成長が始まる

2月度認証式

2月26日、本山において認証式が行われた。これは新しく道院を設立、または道院長を交代した者の約1年間の道院運営・活動状況を評価し認証するものである。今回16人が認証され、正式に道院長として活動をスタートした。

認証式では、本堂の厳粛な雰囲気の中、道院長として布教していく使命感を胸に全員が誓願文を読み上げ、その後、浦田武尚代表から認証者一人ひとりに認証書と道院長の辞令が授与された。

式典終了後は、今後も軌道に乗った道院活動ができるよう、フォローアップ講習が行われた。田村宗務局長より道院の実務について、金剛禅の意義と立場を踏まえた説明があった後、班別討議を通して認証に至るまでの運営状況を振り返り、情報交換が行われ、互いに刺激を与え合った。

最後に、浦田代表から「初めから完璧な道院長はいない。自(みずか)ら学び、経験を積み、門下生とともに成長し、金剛禅を広めていってほしい」との激励があった。新しく道院長となった彼らの今後のさらなる活躍に期待したい。なお、今回から認証を受けた道院長について、オフィシャルサイトで紹介しているので(任意掲載)、こちらも併せてご覧いただきたい。(冨田雅志)

金剛禅布教者の使命感を共有する

千葉県教区研修会

1月22日、千葉市のホテルにて千葉県教区研修会が開催されました。講師は前回の県教区研修会に引き続き、関東教区総代の矢島隆禅先生をお招きしました。今回は、僧階教本から、権大導師の履修科目である「少林寺拳法の修練と金剛禅の修行の比較」と、中導師の履修科目である「少林寺拳法指導にあたっての心得」の二つのテーマを取り上げて、「宗教心を持つこと」と、「調和感覚を持った人になることの」重要性などを、矢島総代ご自身の経験談と、独特のユーモアを交えてご講義いただきました。

また、「私が考える理想境は難しいものではない」という開祖の法話を引用して、理想境建設への挺身(ていしん)を訴え、「われわれの運動の本当の重要性に世間が気付くのには、10年、20年の時間がかかるかもしれないが、それまで根気強く布教していかなければならない」と説かれました。参加した県内75道院の道院長と僧階を有する幹部拳士は、新年早々金剛禅布教者の使命感を共有でき、大変有意義な研修会となりました。(藤田竜太)

桑名市内の三道院による合同稽古開催

桑名大山田道院、三重桑名道院、三重多度道院

4月1日、桑名大山田道院と三重桑名道院、三重多度道院の三道院の拳士が集まり市内の文化スポーツ施設「スター21」を会場に合同稽古を開催しました。三重県桑名市内で活動している三つの道院が他所(よそ)の拳士との交流や技の研鑽(けんさん)を目的に年に一度開いていて、今回で4回目を数えます。開祖がおっしゃられた「『横のつながり』を大切にしよう!」と始められたこの行事も、今回は一般拳士、約20人が集まり、あまり一緒に稽古をすることのない他の道院の拳士と技を掛け合ったり、教え合ったりして、和気あいあいとした雰囲気で2時間半という時間が、あっという間に過ぎていきました。日頃の稽古ではなかなか教わらない鎮魂行の唱和の仕方や、打棒の正式な持ち方、打ち方、正しい合掌礼などの講習もあり、参加者は真剣に取り組んでいました。

この三道院は日頃からつながりが強く、宗道臣デーでの公園清掃をはじめ各種行事など協力して行っています。(松田孝弘)

新春法会

東京別院

1月19日、近隣教区道院長・一般拳士約40人の参列の下、東京別院にて新春法会が挙行されました。年頭にあたり宗由貴師(し)家(け)より、「ことしも少林寺拳法の技と教えを広め、日本を元気にできるように力を合わせましょう」と挨拶(あいさつ)がありました。続いて秋吉好美東京別院別院長から、「東京大塚道院に通う拳士は、日頃から意見を出し合い自分たちで工夫しながら修練に励んでいる。〝人を倒すためではなく、周囲と強調し合って、自らを成長させるために修練を積む〟という少林寺拳法の教えを見事に守っている、彼らのような拳士たちをことしも増やしていきたい」とお話がありました。2部の懇親会では、東京大塚道院の渡邊春夫拳士による詩吟の披露や、練馬交響楽団に所属する山口和彦拳士とご友人の方々による弦楽四重奏の出し物があり、大きな拍手が湧き起こりました。(新元愛美)

投稿大募集 〒170-0004 東京都豊島区北大塚2-17-5 東京別院 広報誌担当宛 TEL.03-5961-1400 FAX.03-5961-1401
e-mail：aun@shorinjikempo.or.jp ※投稿記事は400字を目安とし、名前、所属、連絡先を忘れずにご記入ください。なお、誌面の都合上、原稿内容の整理・編集をさせていただく場合があります。原稿の選択はご一任ください。ホームページには誌面以外の投稿も掲載しています。

2011年10月度　認証

●新設

名古屋北道院　北村 誠
宮崎橘道院　大西 桂一郎
渋谷南道院　小林 修
流山南道院　近藤 英樹
岡山大福道院　平松 義雄
群馬みどり道院　中島 匡裕
浜松蒲道院　伊藤 哲夫
茨木東奈良道院　森迫 剛
刈谷北道院　児玉 靖
豊橋芦原道院　古西 眞二
宮崎霧島道院　林 忠億

●道院長交代

千葉松戸道院　野口 正登
福島瀬上道院　鈴木 賢一
埼玉本庄道院　石川 奈々恵
埼玉幸手道院　服部 宗三
大分春日道院　黒木 豊
山形いずみ道院　後藤 学
倉敷真備道院　田中 聡範
大阪藤阪道院　渡辺 昌宏
伊予八幡浜道院　濱本 惣次

2012年２月度　認証

●新設

那覇北道院　島袋 容子
東京月島道院　西川 明輝
一関東部道院　吉田 浩士
埼玉蕨道院　神保 一也
杉並東道院　是枝 直明
三重多度道院　林 比登志
姫路宮上道院　川口 昌宏
つくば花畑道院　古谷野 好栄

●道院長交代

秦野道院　飯田 昌一
山口厚狭道院　渡部 菜穂子
綾部道院　福井 喜義
琴弾道院　倉本 亘康
東豊中道院　梅里 和彦
神戸港島道院　炭原 修一
愛知十四山道院　齋藤 宏
大牟田新世道院　金森 剛

５月の本山行事
12日(土)～13日(日)
道院長研修会１次
13日(日)　開祖忌
19日(土)～20日(日)
道院長研修会２次
27日(日)　帰山

６月の本山行事
２日(土)～３日(日)
道院長研修会３次
９日(土)～10日(日)
道院長研修会(東北・北海道)
16日(土)～17日(日)
道院長研修会(九州・沖縄)
24日(日)
特別昇格考試、認証式

僧階昇任者

権大導師

2011年12月1日付
小穴 秀樹(熱田道院)
田中 伸彦(伊予松前道院)

中導師

2011年12月1日付
徳原 幸則(徳山道院)

小玉 将臣(都城いずみ道院)

2012年2月1日付
酒井 英幸(山陽網干道院)

2012年3月4日付
吉田 将人(専門学校禅林学園)
加藤 雄一郎(専門学校禅林学園)

権中導師

2011年12月1日付
髙倉 春治(熱田道院)
梶川 勉(茨城牛久道院)
寺川 秀樹(広島八丁堀道院)
留守 龍一(仙台南道院)
鈴木 道臣(宇部常盤道院)

松浦 俊也(盛南スポーツ少年団)
足立 富哉(浜松可美道院)
佐々木 一夫(八戸岬道院)
髙塚 忠行(岩国南道院)
池田 和垂美(若松中部道院)
前田 邦広(三田南道院)

法階昇格者

准範士

2011年12月18日付
岡安 豊(湘南誠志道院)
大江 明夫(山科道院)
増田 伸幸(東京石神井道院)
大上 秀樹(大森道院)
柴田 康弘(高砂鹿島道院)
炭原 修一(神戸港島道院)
野辺 耕一(大森道院)
平松 義雄(岡山大福道院)
岡本 久雄(四條畷スポーツ少年団)
笠井 寛治(小豆島道院)
松田 晃治(大阪蹉跎スポーツ少年団)
中村 隆典(松山武南道院)
深見 邦夫(東大阪市役所)
森田 典秀(鳥取浜坂道院)
武田 尚文(徳島国中寺道院)
古谷野 好栄(つくば花畑道院)

その先に
こころの
喜びがある

感じていることを

みんなで話し合い

みんなで考えて

行動してみよう

100th Anniversary of the Founder's Birth
宗祖生誕100年

2012年度宗道臣デー月間

※「開祖デー」は2011年度より「宗道臣デー」へと名称が変わりました。

詳細はオフィシャルウェブサイトへ
http://www.shorinjikempo.or.jp/100p/index.html

『宗道臣デーのてびき』で志気を上げよう！

◆各道院で毎回の修練時に、５分間の事前勉強会を開催しましょう。
◆事前勉強会では、『宗道臣デーのてびき』を教材としてご活用ください。
◆幹部拳士はもちろん、一般拳士、少年部拳士と一緒に読み進め、自発的な取り組みにつなげましょう。
◆『宗道臣デーのてびき』は事業課にて販売中。一部150円(消費税込)。

編集後記▶この季節、木々はエネルギー全開で新芽や花びらが大地を覆い尽くす。すばらしいダーマの力だ。▶新年度が始まり１か月。人々も新たな目標が決まりそこに向かい大きなエネルギーが動き始めている。金剛禅の布教活動もこのエネルギーと同じである。▶全国各地に新芽といえる新道院が誕生し、人が集い金剛禅運動の輪がさらに広がることを願い、共に活動したいと思う。　（お）

表　紙▶河合 修　愛知県出身。日本を代表する写真家・藤井秀樹氏のアシスタントを経て独立。2009年5月より「ダーマ」をテーマに、『あ・うん』の表紙撮影に取り組む。ホームページは「写真家　河合修」で検索！名古屋千種道院、中拳士三段。

金剛禅総本山少林寺オフィシャルサイト▶
http://www.shorinjikempo.or.jp/religious/index.html
２週ごとに更新される代表メッセージをはじめ、「宗門の行としての少林寺拳法」を動画でご覧いただけるほか、誌面に掲載しきれなかった記事・写真も掲載されています。

金剛禅総本山少林寺　検索

あ・うん　金剛禅総本山少林寺広報誌　vol.22　2012 皐月・水無月

2012年５月１日発行（奇数月１日発行）
発 行 人 ：浦田武尚
発 行 所 ：金剛禅総本山少林寺
〒764-8511
香川県仲多度郡多度津町本通3-1-48
☎0877-33-1010
http://www.shorinjikempo.or.jp
編 集 人 ：大澤 隆
企画・編集：金剛禅総本山少林寺東京別院
〒170-0004
東京都豊島区北大塚2-17-5
☎03-5961-1400
e-mail aun@shorinjikempo.or.jp
印刷・製本 ：㈱ブル・ドック
※本誌の発行に掛かる費用には、SHORINJI KEMPO UNITY によるライセンス事業の収益金が活用されています。

広報誌『あ・うん』追加発送について ◇◇◇◇◇◇◇
現在、広報誌『あ・うん』を１道院につき10部ずつ（一般財団支部は１部ずつ）、毎号ご提供させていただいております。更に追加をご希望の方は本山宗務部にお申し出ください。（追加１部につき50円・送料別途要）
TEL.0877-33-1010
e-mail fukyoka@shorinjikempo.or.jp

一期一笑

イラスト／大原由軌子

岩手東山道院　伊藤昇市

祝・食堂の再出発

昨年３月11日、東日本大震災の津波で壊滅的な被害を受けた陸前高田市に、神奈川県の炊き出し隊が到着したのが翌４月のことでした。

神奈川大和道院の人脈で結成された炊き出し隊は「ラーメン隊」と呼ばれ、「温かい料理とともに私たちの気持ちを届け、被災者の方々を勇気づけ、少しでも心を癒やしていただきたい」という「思い」を形にする活動でした。ラーメン隊のお手伝いには陸前高田道院の拳士と保護者会の方も参加していましたが、その中に拳士ではない地元の方もいました。

陸前高田駅前で飲食店を営業されていた二人の熊谷さんです。一人は大衆酒場を、もう一人は中華食堂を営業していましたが、お二人とも津波で店を流されてしまいました。

その方たちがラーメンの仕込みや丼の盛りつけをお手伝いしているうちに、津波に店が流される前のように、再度店を出したいとおっしゃるように変わっていきました。それを聞いたとき、ラーメン隊のもう一つの使命、「被災者の方々の自立への支援」が伝わったのだと思いました。

彼らは年が明けた２月、陸前高田市の今の商業地にダブル熊谷で一つの建物を建て、大衆酒場と中華食堂を営業再開しました。早速私もお祝いに行ってきました。

ラーメン隊の活動がこのように地元の方の起業のお手伝いとなったことに、心から敬意を表します。本当にありがとうございました。

投稿大募集　道場や拳士のちょっといい話を募集しています。※ペンネーム可ですが、必ず、名前、所属、連絡先もご記入ください。なお、原稿内容の整理・編集をさせていただく場合があります。原稿の選択はご一任ください。〒170-0004 東京都豊島区北大塚2-17-5　東京別院 広報誌担当宛
TEL.03-5961-1400　FAX.03-5961-1401　e-mail：aun@shorinjikempo.or.jp

宗門の行としての少林寺拳法

Sango Ken, Chudan gaeshi
三合拳（さんごうけん）　中段返（ちゅうだんがえし）

我は中段を誘って待気（たいき）に構える。相手の差込蹴（さしこみげり）に対し、前足をやや引き寄せて前鈎足（まえかぎあし）になりながら、体をかわすと同時に下受（したうけ）し、水月（すいげつ）へ蹴り返す。三合拳は、足または手の攻撃に対し、手で受けて足で反撃する技法であるが、決して手だけで受けるのではなく、必ず体捌（さば）きを用いて受けることが大切である。反復修練によって体捌きや受け手の用い方、攻防の間合や先のとり方のコツを身に付けたい。

撮影／近森千展　文／飯野貴嗣　演武者／守者：川島一浩 正範士七段　攻者：飯野貴嗣 准範士六段